

有栖山公園通信

其乃拾五

平成十八年八月十三日 (コミックマーケット70)

有栖山公園 (<http://www.aliceyama.jp/>)

有栖山 葡萄 (budou@aliceyama.jp)

有栖山公園は「かもぎでジャパン」に掲載しています



はじめまして&おひさしぶり。本日は御立寄りありがとうございます。

「有栖山 葡萄」と申します、しがない二次創作小説書き同人屋でございます。

さて、今回は新作読切短編となりました。「恋戦」の続きは？ という声も有るかと思いますが、書いていません、ごめんなさい。広げた風呂敷が大きすぎて、畳むのがとても難しいのですよ。冬までには完結させておきたいなあ、思っていたりします。

そしてとりあえず時間の空いたときに、薔薇シリーズ再録合併加筆拡大版をちまちまと段取りしておこうかと。今度は新書版で。カバーは薔薇の箔押しとか。

まだまだ同人活動はやっていきたいなと思っているので、見捨てずにいてくださいませ。作品のクオリティーももっとあげていきますので。

あ、今回は食い物ネタなかったなあ。そのあたりはWeb 日記でどうぞ～

では、またどこかでお会いしましょう。今度は大晦日かな？

2005年8月13日 有栖山葡萄拝

今回の本の修正箇所 17ページ 上段 25行目

「そして馬内毒血に運んで一息つく」 → 「そして、今一度口に運んで一息つく」
な、何を言っているのか判らない。と、ポルナレフが出てきそうな誤字が。
ごめんなさい、さすがにシール張りしました。校正はちゃんとやりましょう、ほんとに。

白い息を吐きながら、ドアノブに手をかける。

「ただいま」

声をかけると、そのまま奥のリビングへと進んだ。

「あ、おかえりなさい。西園寺さん」

そういつてソファアに座ったまま、戻ってきた彼女を出迎えた。西園寺世界はそのままソファアの向かいに座ると、手にしていた荷物をテーブルの上におき、腰をかける。

「ふう、桂さん早かったのね。誠は？」

そういうと、世界が部屋を見回す。

「あ、誠君なら先ほど電話があつて、少し遅くなるって」

桂言葉が、本を読みながら軽く答える。そしてテーブルの上にあるカップを手にし口につける。

「西園寺さんも紅茶、飲みます？」

すでに空になつて居たカップに気が付くと、言葉は世界に向

かつて問い掛けた。

「そうね、桂さんの紅茶美味しいから、飲みたいかも。外寒かつたし」

世界が窓の外を見ながら、答える。

「そうですね、今夜は一段と冷えますから」

言葉は立ち上がり、台所に向むかつた。リビングに一人残された世界は、寒さに縮んだ身体をゆっくりと伸びをしてほぐすと、小さくため息をつきソファアに深く沈みこんだ。壁にさえざられ姿は見えないが、台所にたっているであろう彼女を見た。

言葉は何事も無かつたかのように、ごくあたりまえにお茶を入れていられるであろう。しかし、世界にはもう限界に達していた。

この異様な状況に。

誠の事が好きで、身を引くことは出来ない。だけど、彼は今の三人での付き合いか認めていない。だから自分も我慢して、受け入れるしかないのだと。こうなつてしまったのは、自分のせいなんだからと。

「お待たせ」

お盆に載せた二つのカップと一つのポット、そしてシュガーポットがあつた。言葉はカップをそれぞれの前に置くと、ポットから琥珀色の液体を注ぎいれる。カップからは、暖かそうな湯気が出ていた。そして、世界にシュガーポットを差し出す。

「どうぞ、西園寺さん」

「ありがとう、桂さん」

素晴らしい、世界は砂糖を二杯入れると、カップを手にし口をつける。暖かい液体に、体がゆつたりしていくのを感じる。

二人の間に何の会話も無い、痛いくらいの静かな時間が流れていた。その静寂を破つたのは、言葉だつた。

「西園寺さん。丁度誠君も居ないし、お話ししておきたい事があるんです」

そういうと真剣なまなざしで、彼女は世界を見据えた。その視線に、世界の温まつた身体は再び一瞬にして凍りつく。なんともえない冷酷な瞳に、世界は戦慄を覚えた。

「ど、どうしたの、桂さん。えつとその、あはは」

言葉の雰囲気飲まれた世界は、空笑いをしてその場をしのごうとした。

「気が付いてました？ 私二ヶ月、来てないんですよ」

その台詞の裏にある可能性に、世界は何も言えずに居た。

「西園寺さんなら、分かりますよね、この意味。私、今日病院に行つてきたんです。そしたらですね」

「待つて」

笑顔というにはあまりにも冷たい表情に、世界は恐怖し思わず次の台詞をささぎつた。

「いいえ、待ちません。だつて、西園寺さんも現実を知つておいたほうがいいと思うんです。これからの三人のためにも」

世界は、これから彼女が言おうとしている台詞を感じ取つた。おそろく自分がその立場になつたら言うであろう台詞を。世界は耳を塞ぎ、首を横に振ると「聞きたくない」と繰り返した。

「西園寺さん。私と誠君の子供が出来たんですよ。お祝いの言葉くらい、掛けてくれてもいいじゃないですか。だつて、私たちの仲を取り持ってくれたのは、あなたじゃないですか」

言葉は世界を嘲り言葉を続け、その現実を突きつけた。